

明治以降から現代の水産業

■漁業

明治25年の東松浦郡の漁業戸数は2588戸で、佐賀郡が1158戸なので、漁業は東松浦郡が中心だった。なかでも特徴的なのは捕鯨業で、呼子村に明治11年に捕鯨会社が設立された。捕鯨業が会社組織で行われるようになり、同社は明治22年に小川島捕鯨株式会社になった。

漁業戸数を明治34年についてみると、東松浦郡に3156戸、佐賀郡1341戸。鯨船数でも佐賀県内の半数が東松浦郡に所在していた。

遠洋漁業も行われ、日本形船20艘ほどが朝鮮近海まで操業していた。漁業の発展により、魚市場も設けられ、唐津魚合資会社が経営していた。同社の36年の資本金は6万円で、当時42ほどあった佐賀県内の合資会社の中では二番に大きな資本金だった。このことから、漁業が盛況であったことが窺われる。

魚会社は佐志村の唐津海産物合資会社が35年に設立され、呼子村にも、26年設立の呼子水産合資会社と、30年創立の呼子合資会社があった。漁業も魚市場の増加にみられるように大正期には盛況で、佐賀県では中心的な水産業地域となった。

■水産業の発展

水産業においても、佐賀県内では東松浦郡が他地域を著しく上回るようになった。大正7年の漁獲高は100万円近くなり、佐賀郡が52万円であったことからすると、倍以上の漁獲をしていた。食用品の魚加工品の製造も39万円に達し、佐賀郡と佐賀市がそれぞれ12万円台であったことから、この分野においても、県内では顕著な発展をしていた。これは漁業会社の増加となり、大正3年には相知村に相知魚市場株式会社が、6年には唐津町に唐津魚株式会社が設けられ、魚市場と海産物委託販売の会社が海産物流通の中心的存在になった。

■現状

玄海地区における水産業は、水場の大部分を占める大中型旋網漁業の「沖合漁業」と「沿岸漁業」及び「養殖業」となっている。沖合漁業は、日韓及び日中漁業協定等国際的な漁業規制の強化や漁業資源の減少、漁獲量の総量規制（TAC）の中で漁獲量は減少の傾向にある。また、沿岸漁業においても、漁場環境の悪化、漁業後継者不足、水産資源の減少による漁獲量の減少、魚消費の減少、魚価の低迷さらには近年の燃油高騰等の要因により漁業経営は厳しい状況にある。

◎エピソード・伝承・うんちく など

唐津・東松浦地区に関する最古の文献である『魏志倭人伝（ぎしわじんでん）』が、潜水して魚介を獲る「海士（あま）」のことを特記していることはよく知られている。

分野	産業
地域	全域

◎地図・写真・統計資料など



漁港位置図
(佐賀県漁港漁場協会HP)

◎引用・参考文献（出典）

- ◆『唐津藩四百年記念からつ歴史考（唐津市）』著者 佐賀大学 経済学部教授 長野 暉 P84・88
- ◆『唐津市水産業の概要（2010）』唐津市水産課

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：
http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html